婦人宣教師、ミセス・プライシの
「おばあちゃんの手紙」（7）

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林　恵子

最初の手紙（十）は日本の子ども達について書いたものである。ピアソンは子ども達の性質が良くておとなしいと書いているが当時の子どもがそうだったのか、現在の我々には首をかしげたくなるようである。しかし、ピアソンが日本の子どもをとても愛していたことがこれらの手紙から読みとれる。ところで、当時の横浜は国際的な貿易港として賑わい外国商人や船員の遊楽の港として風儀も乱れ、貧しい人々が多かったのである。目がただれ頭に腫れ物ができ、みじめで病気のように見える子どもや小さな赤ん坊を背中にくくりつけて遊ぶ大きな子どもの姿は当時はどこにでも見られたものであった。

日本の古い因習に生きる人々の生活に疑問を抱くピアソンの手紙はしばしば偶像礼拝を非難して書いているが、それだけに当時の宣教師によって医学、自然科学、教育、音楽など近代化の推進に開拓者としての役割を果たした貢献は高く評価されるべきであろう。

一八七一（明治四）年八月二八日、横浜山手四八番で開設したアメリカン・ミッション・ホームは中村正直が

広告文を書いたあと生徒が増え入学希望者を断らなくてはならないほどになった。このため、プラインたちは広い建物と敷地をさがし、翌年の十月一日に山手二一二番（現・横浜共立学園校地）に移転した。そこはロシア公使のために用意されていた土地と敷地約三エーカーで広々とした土地には松、柳、桜、木蓮、椿などの樹木が茂り（註1）隣地には宣教師S・R・ブラウンの邸宅があった。ブラウンはここで聖書を邦訳し、塾を開き日本の近代化に貢献した青年男子を教育したのである。

十一月十日の手紙（十三）で判るように、プラインたちを悩ませたのは二一二番には男の子と女の子を別々に収容する部屋がなく、ここで大きな決断を余儀無くせざるをえなかったのである。祈りをかさね討議し、将来を見通して遂に女子教育に専心することを決意したのであるが、男の子達をホームから出すときはどんなに辛かったことか手紙から察せられる。

ホームは日本婦女英学校（現・横浜共立学園）と改称したが、混血児の教育は明治二四年まで続けられた。

十、

横浜、一八七二年八月六日

愛するメアリー、バーティ、キティーへ

今日、この家であなたたちが歩きまわっているのを見ることができたらどんなにいいでしょう！ そして私の両腕であなたたちをしっかり抱きしめ、何度も何度もキスすることができたら！ でも、それは出来ないこと。私があなたたちのことをどんなに思っているか、私の見聞きする沢山のことをあなたたちにお話ししたくてたまらない気持ちをわかってもらえるかしらね。時間があればもっと日本から手紙を書くのですけどね。それに、他の可愛い子どもたちにも手紙を書きたいのですけど、時間がないのでお母さんかAおばさんに頼んでこの手紙を職業学校に届けて下さい。そして、学校の子どもたちに読んで貰って皆に楽しんで貰い、私がどんなに遠く離れていても皆のことを考えていることを知ってほしいのです。

さて、日本の子どもたちについてもう少しお話しましょうね。それは、あなたたちにこの国の子どもたちのことを出来るだけ知って欲しいし、子どもの話を聞くのはきっと好きだろうと思うからです。私は日本の国が広さに対し大人の数が世界の他の国と比べて多いのでこの国にはとても沢山の子どもがいると思います。

この国に住む人々にとって幸せなことは子どもたちがとても性質が良くておとなしいことです。もし、この子たちが私が以前に見たような乱暴で喧嘩早い子どもたちだったら大変でしょうね。ある人たちは日本の子どもの性質が良いのは親たちが何でも子どもたちに好きなようにさせているからだと言っています。さて、それは子どもにとって大変すばらしい事だとあなたたちは言うに違いないでしょうね。この国の子どもたちのようにそんなに悪いことをしないならばよいのですがね。でも私は日本の子どもたちは別として、そんなやり方をさせようとは思いません。私は日本の子どもたちほど生まれつき性質の良い子どもは他にないと思います。

でも、この子どもたちの生活は幾つかの問題があって、ある子どもたちは国の保護と世話を非常に必要としています。この子たちは、汚くて目はただれ、頭には腫れ物ができていて背中が曲がり、みじめで病気のように見えます。そしてこの子たちやその親たちは他にもっと良い生活があるのだということを知らないのです。街を歩くとどこでもこうした子どもたちが群がって来て、よほどの忍耐と哀れみの心がなければうまくつきあっていく事は出来ません。

とても面白く思うことが一つあります。街で見かけることですが六歳から十歳、或いは十二歳位の子どもが向こうからやってくる時、頭が二つあるように見えるのです。さて、あなたたちはどうしてだと思いますか？　それはね、日本では赤ん坊を腕で抱くかわりに背中におぶっているのですよ。そう、すこし大きくなった子どもたちは小さな赤ん坊を背中

に紐でくくりつけているのです。これが赤ん坊をお守りする最もやさしくて安全なやり方だからです。そこで、この子たちが向こうからやってくる時には肩ごしに赤ん坊の頭だけしか見えないのでまるで頭が二つあるように見えるのです。私はそれを見馴れるまで何度もその奇妙な子どもの姿を見てびっくりさせられたものです。これは、可哀そうに赤ん坊にとっては大変苦しいやり方だと思います。なぜなら赤ん坊が眠ってしまうと、―赤ん坊はよく背中で眠っていますが―可哀そうにその小さな頭は後ろにのけぞり、太陽の光が顔や目にギラギラと照りつけ、その首は折れてしまいそうに見えます。

大人たちも子どもたちも帽子をかぶらず太陽の陽ざしをさけることをしていないのです。大人たちは日傘をさすことはあっても子どもたちは何もしてないのです。ですから多くの子どもたちはひどい腫れものができるのです。人々は邪悪でとても悪い習慣があるので神様は罰としてそういう人々を病気にさせ身体を弱くさせます。また、恐ろしい病気にかかるので可哀そうにそれが子どもに移って子どもたちを苦しめるのです。子ども自身にはどうすることも出来ないのですから本当に可哀そうだと思います。なお悪いことに、ここには蚤や蚊が一杯いて子どもたちはそれに刺され、かゆいためにあちこち掻くので又それが傷になってもっとひどくなってしまうのです。

私が一番悲しく思うのは、この人たちがもっと良い暮らし方のあることを知らない事です。この子どもたちの親たちは自分たちがもっと清潔で勤勉で正しい暮らしをすればこんなひどい病気にならずにすむということを知らないのです。彼等はいつも拝んでいる偶像が自分たちの病気をなおすのに何の役にもたたず、それが出来るのは父なる神だという事を知らないのです。

ある日、私は目のひどくただれた男の子が寺に行くのを見ました。寺はこの人たちの教会のようなと

ころです。この子は、あなたたちの部屋の天井くらいの高さもある大きくて見るも恐ろしい像の前に上がって行きました。この像は赤や黒、白の色で塗られていて、その口を大きく開きべろっと舌をだしていて、それはなんとも醜い像なのです。男の子は両手でその像の足や脚をなでまわし、その手で自分の両方の目をなでているのです。

私はバラ宣教師に何のためにそんな事をするのかと尋ねました。彼が言うには、その神さまは目の病気をなおす神様で人々はその神様にさわった手で目をさすると目の病気がなおると信じているのだそうです。

この人たちにもっとよいことを教えるべきと思いませんか。……略……

それからもう一つ、私にとって悲しいことは前に書いたと思いますが、この国の人々が歌を歌わないことです。

このホームの小さな子どもたちが優しくて美しい日曜学校の讃美歌を歌うのを聞くのは本当に楽しいことです。でも、この国の可哀そうな子どもたちは人間は声をもっていてそのような目的のために使う事を教えられていないのです。この国の言葉で書かれた讃美歌はまだ一つもありません。なんという損失でしょう。そう思いませんか。

このホームの私たち女の人たちや宣教師たちみんなはこのホームの子どもたちに大切な真理を教え、これまでよりももっと賢く幸せになるよう心から願っています。これは正しいことと思いませんか。そして是非このために私たちを助けてほしいのです。

……略……

あなたたちは幸せで楽しく暮らせる家庭があり、聖書があり、天にいらっしゃる父なる神の愛について知っていますね。私はあなたたちに日本の気の毒で無知な人々のために何かしてあげたいと思って欲しいのです。私はアメリカの子どもたちが自分だけの楽しみのためにお小遣いを全部使ってしまうより

はそれを貯金してミッションの献金箱に入れてほしいと願っています。お金を自分だけのために使っていると利己主義になって強情で不親切な人間になってしまいます。でも、もしあなたたちが良いことをしようと努力し、自分の出来るかぎり他の人々のためになろうとすれば、だんだんと私たちの救い主に似てくるでしょう。そして、きっと、もっと幸せになり他の人々に愛される人間になるでしょう。私はあなたたちがそのような子どもたちになれるよう神に祈っています。

あなたたちが愛する　おばあちゃんより

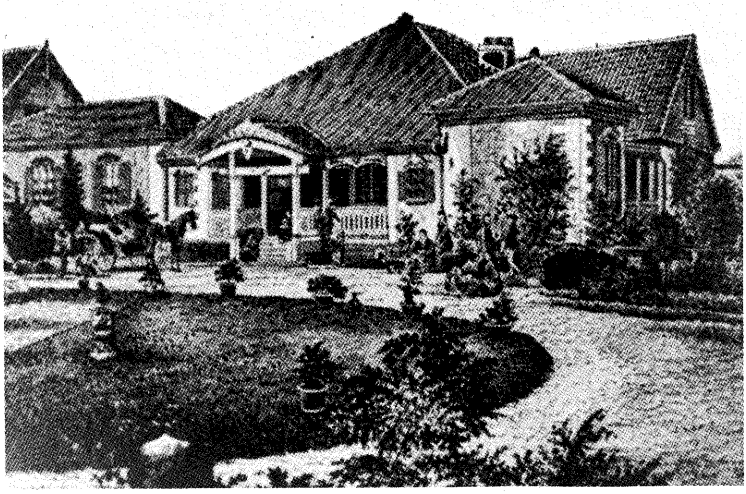
＊

十三、

横浜　一八七二年十一月十日

故国の可愛い孫たちへ

私たちが素敵な大きな家（写真参照）に移って皆



がとても満足して暮らしていることはお父さんやお母さんあてに書いた私の手紙で聞いていますよね。今では私たちの家族も増え、前よりもっと快適になりました。そのことについてはこれ以上何も言うことはないのですが、でもこんなに楽しい私たちに大変悲しいことがあるのです。それは私が日本に来てから味わった最も辛いことの一つでした。あなたたちもそれを聞いたら私たちと同じように悲しむだろうと思いますが、それは私たちと一緒に暮らしてきた小さな男の子たち全員をこのホームから出ていって貰うことになった事です。

私があの男の子たちをどんなに可愛がっていたか、あなたたちは知ってるでしょう。とくにあの小さなチャーリーとエディーのことはわかってくれるでしょうね。私は自分の亡くした子たちが身代わりになってここに来てくれたように思っていたのですよ。でも、いろいろとやってみて男の子と女の子とを別々に入れる部屋がなければ一緒にしておくのは良くないということが分かったのです。私たちはなかなか決断できず、何度も何度も話しあい、神様にどうぞ最善の道をお示しくださいと長い間祈りました。そして私たちは決断したのです。日を定め、男の子の親戚や知人に来て貰って全員を引き取って貰うことにしたのです。

それは何と悲しい日だったでしょう！　可哀そうに男の子たちはこのホームから出たくないと言って大声で泣くものですから私たち女の人たちも一緒になって泣きました。一人の小さな男の子は門を出るとき、道端の草のうえにひっくりかえって「いやだ、いやだ、この家から出ていきたくない」と言って泣きじゃくりました。

私たちはそれが神の意志であると考え、女の子たちだけになればもっとよく教育できると思ってしたことだったのです。今はただ、神様がこの男の子たちのために良い友だちを与え、ここと同じような家庭を与えてくださるようにと祈っています。そしてそ

こでイエスについて教えられ良いクリスチャンとして成長するように私たちみんな心から願っています。

これからはあなたたちもこの学校とホームが女の子たちだけしかいないと思って下さい。でもバーティ、それならもうおばあちゃんたちを手伝わない、お小遣いをためたりなどしないなどと考えないで下さいね。なぜって、この学校で学んでいる女の子たちは、やがて先生になって男の子たちを教えるのです。そして私たちよりもっと多くのことを男の子たちにしてあげられるようになるのです。

さて今日は私たちの可愛い女の子たちの一人についてお話をしてみたいと思います。幼いアニーについてはこれまでに度々書きましたよね。

ある朝、私はいつものように子どもたちの世話をするために朝食のテーブルにつきました。そこで、いつも私は子どもたちの暗唱する聖書の何節かを聞くことになっていたのです。そのとき私はアニーがいないのに気がつきました。私はどうしてアニーがいないのかと尋ねました。あの子は病気だというのです。そこで私がすぐアニーの部屋に行くと、ただ少しおなかが痛いからと言って寝ていたのです。でも本当は小さい子どもによくあるように、なまけぐせと眠いのとで朝早く起きるのが嫌だったらしいのです。

「さあ、さあ」と私は言いました。「起きて朝ご飯を食べに来てちょうだい。その後でおなかが痛かったら又寝ればいいでしょう。さあ、さっさと着替えて早くいらっしゃい」

そして私は朝食のテーブルにもどりました。それからまもなく一人の紳士が職人をつれてやって来ました。この前のひどい地震で壊れた天井を修繕するために様子を見に来たのです。この紳士はとても親切な人で私たちを助けたいと思ってくれていました。そこで日本の石工に見せてどのようにするか話しあってくれました。その壊れた天井というのが丁度アニーの寝ている部屋だったのです。そこで私た

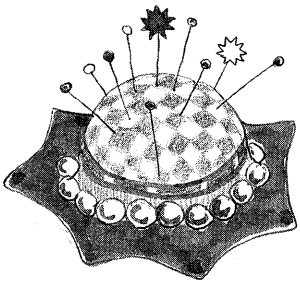
ちは天井を見るためアニーの部屋に行きました。私たちが部屋に入ったとき、この幼い子どもは小さな寝床のそばにひざまずいて、一人で朝のお祈りを唱えていました。この子は驚いて飛びのくでもなく、いそいでお祈りを終わらせるでもなく、とても静かに目を閉じて小さな両手を組み合わせていつものように朝のお祈りを静かに唱えていたのです。

その紳士はクリスチャンではありませんが、この子の姿を見て私をふり返り目に涙をためて言いました。「なんて、いじらしいのでしょう」と。

アメリカのクリスチャンの子どもの何人が私たちの小さなアニーと同じような行動がとれるでしょうか。もし、あなたが他の子どもたちがもうご飯をあらかた食べ終わって早くしなくちゃと焦っているときに立ち止まってお祈りをするなんて考えられないでしょう？　それに知らない人が部屋に入って来ても驚かないでひざまずいたまま祈っているなんて考えられますか。

アニーのお話はあなたたちに善い教えとなるでしょう。あなたたちにとってもお祈りが非常に善いもので神聖なもの、誰も邪魔することはできないものになってほしいと願っています。

あなたたちの愛するおばあちゃんより

（国立音楽大学）

註（1）「横浜共立学園120年の歩み」
横浜共立学園　一九九一　51～52頁